

倶知安町 有限会社 中崎農場の経営概要と麦作り

1 市町村の概要

倶知安町は北海道西部の後志地方にあり、南に羊蹄山、西にニセコ連峰がある小盆地に位置しています。

冬は年間平均10mの降雪量と2m弱の最深積雪を記録するなど、日本でも有数の豪雪地帯で、近年ではスキーなどを目的とした国外からの観光客が多数訪れています。

春から夏にかけては温暖な気候であり、古くからばれいしょの産地として知られており、ばれいしょをはじめ小麦、豆類、てんさいなどを栽培する畑作経営を中心とした農業が盛んです。



代表取締役・中崎貴さん

2 中崎農場の経営概要

家族構成	経営規模		左の内 借地面積	輪作体系					輪作の特徴
	水田	畑		平26	平27	平28	平29	平30	
総人員 7人	0ha	55ha	5ha	緑肥	てんさい	大豆	ばれいしょ	小麦	畑作主体であり、4年輪作を行う
稼働人員 6人	合計	55ha	5ha						

中崎農場は経営面積55ha、倶知安町岩尾別地区で小麦（春まき・秋まき）、ばれいしょ、てんさい、大豆、小豆を作付けする畑作経営を営んでいます。

同農場は平成17年3月に法人化、現代表取締役の貴さんは、平成14年3月に大学を卒業すると同時に就農し、平成26年12月から代表取締役に就任しています。

現在は5名の従業員を雇用しており、家族を含め常に十分な労働力を確保して、無理のない作業を心がけています。

中崎農場の作付構成

作物名	作付面積 (ha)
春まき小麦	3.5
秋まき小麦	6.5
ばれいしょ	15.5
てんさい	13.4
大豆	6.1
小豆	10.0
合計	55.0

3 春まき小麦の生産状況

最近3ヶ年の春まき小麦生産状況

年産	小麦品種名	小麦栽培面積 (ha)	麦作率 (%)	10a当たり収量 (kg)		上位等級生産量 (kg)	左の等級別検査数量 (kg)		規格外数量 (kg)	規格外を含む総収量 (kg)	総収量対1～2等麦比率 (%)
				農家	統情		1等	2等			
平成28年	春よ恋	2.22	5	385	260	8,545	8,545		1,452	9,997	85
平成29年	春よ恋	2.88	5	289	241	8,337	8,337		1,144	9,481	88
平均		2.55		331	251	8,441	8,441		1,298	9,739	87
平成30年	春よ恋	3.54	7.5	274	275	9,694	7,547	2,147	4,855	14,549	67

品質等測定値 (JAようてい)

容積重 (g/斗)	F.N (sec)	蛋白 (%)	灰分 (%)
841	374	12.9	1.67

過去2ヶ年の10a当たり収量は、町平均に対して120～148%と高水準を確保しています。

平成30年は気象の影響により細麦傾向となり、規格外の割合が例年より増加しましたが、10a当たり収量は町平均を維持しています。

4 技術の内容

融雪促進		融雪期 (月/日)	は種			土性	施肥 (kg/10a)				
時期 (月/日)	資材・散布量		期 (月/日)	量 (kg/10a)	方法		区分	窒素	リン酸	加里	時期 (月/日)
3/25	融雪材 70kg/10a	4/20	4/28	18.0	ドリルは種 (12.5cm幅)	火山性土	基肥	10.0	18.0	12.0	4/28
							葉面散布	0.9			6/30 7/7

除草剤散布		病害虫防除 (植物成長調整剤等)				
時期 (月/日)	剤名・散布量	対象病害虫名	時期 (月/日)	使用薬剤・散布量		
4/29	ガレース乳剤 200ml/10a	赤かび病 赤かび病 赤さび病	6/30 7/7 7/13	シルバキュアフロアブル	2000倍	
				ベフトップジンフロアブル	1000倍	
				チルト乳剤	2500倍	

5 技術の特色

全体を通して「無理をしないで早くは種」「盆前に収穫」を目標として、以下のとおり技術を組み立てています。

(1) 融雪促進と早期は種

ほ場は羊蹄山の麓で積雪が多いため、心土破碎を徹底し、例年3月下旬に融雪材を地域の平均よりも多く散布 (70kg/10a) して融雪促進に努めており、これらにより、例年4月中には種を終えるようにしています。

(2) 土壌水分、土質を考慮した耕起作業

ほ場状態をよく観察し、作業を急がず土壌水分が適切となつてからの耕起を心がけています。

(秋) ばれいしょ収穫後ハーフソイラ⇒(融雪後) ハーフソイラ⇒パワーハロー⇒は種の流れで作業を行っていますが、土質に合わせ、プラウやロータリーハローを併用しています。

(3) は種精度の向上対策

繰り出し方式のグレンドリルを使用し、は種量及びは種深度の均一化に努めています。

膨軟な種床による深まきとならないよう、砕土・整地作業はパワーハロー1回のみを基本とし、は種量は、その年のは種時期に合わせて調整しています。

これらにより、出芽ムラ、遅れ穂が少なくなり、穂揃いが良いため、盆前収穫が可能となっています。

(4) 土壌分析に基づく土壌改良と堆肥による土づくり

毎年、全筆の土壌分析を実施し、目標pH5.8~6.0となるよう、石灰質肥料をほ場に合わせて施用しています。

酪農家との麦稈の交換により籾殻堆肥を入手し、毎年小麦作付け後に施用して、土づくりに努めています。

土壌分析値を参考に、リン酸吸収係数、加里の蓄積などを考慮し、ほ場の特性に合わせた施肥に努めています。

(5) 倒伏軽減対策

倒伏による品質低下を避けるため、5月中下旬頃にケンブリッジローラによる鎮圧を行っています。

(6) 子実の肥大促進

赤かび病防除と同時に尿素（2%溶液）の葉面散布を2回程度行って、千粒重と子実タンパクの向上を図っています。

(7) 適期収穫

幼穂形成期～止葉期にかけての追肥を行わず、遅れ穂の発生を抑え登熟の均一化を図っています。これにより適期収穫が可能となり、穂発芽の回避にもつながっています。

また、個人でコンバインを導入しているのではほ場の状況や天候の急変等にも素早く対応でき、適正水分での収穫が可能となっています。

6 経営上の特徴・工夫など

(1) 労働力の充実

前述のとおり5名の従業員を常雇しており、うち3名が機械作業を担えているため、農繁期においても無理なく適期作業が行える体制となっています。

(2) コスト低減の取り組み

冬期に農業機械のメンテナンスを行い耐用年数の維持に努めています。

(3) 省力化

経営面積は55haですが、ほ場数は7筆と少なく、移動にかかる時間のロスが少ないため、省力化につながっています。

（執筆名：後志農業改良普及センター 地域第一係長 熊谷 健一
JAようてい 第3ブロック営農推進センター センター長 多田 雅彦）